

課題作成における“ツール”の使用を考慮した中級ライティング・コースの試み
An Attempt to Tackle the Students' Potential Use of “Tools” in Writing Assignments in
an Intermediate Level Writing Course

水戸淳子, 香港大学
Atsuko Mito, The University of Hong Kong

1. はじめに

昨今の ChatGPT に代表される生成 AI や DeepL といった機械翻訳などの様々なツールの進化は、日本語学習者にとっての日本語で「書くこと」の意味や方法、そこから得られる学びについて影響を与えていると考えられ、日本語教育研究の分野においてもそれらの活用をめぐる可能性や利用法の検討、懸念や注意点などについて数多くの報告や論考がなされてきている（吉村、2023 など）。また日本語のみならず様々な言語学習の授業において AI ツールを学習支援ツールとして、あるいは学習パートナーとして取り入れた実践報告もされてきている（小澤、2024; 大工原、2024; 水田、2025; 吉田、2025）。

筆者は長年、海外の大学で日本語中級ライティングの授業を担当してきているが、こうしたツールの進化と普及が進む中で、宿題形式での課題（take-home assignment）の出し方に一部変更を加え、AI ツールの使用がどのように学習者の学びにつながるようにコースの中で位置づけられるのかについて検討を試みた。本稿は筆者がアクション・リサーチとして行った小規模な実践についてであり、その内容を共有できれば幸いである。

2. コースの概要と課題について

この試みを行ったのは、筆者が香港の大学で教えている中級のコース内であり、このコースは日本研究を専攻・副専攻する学生の必修コースである。

「Reading & Structure」「Oral」「Writing」の3つのモジュールで構成され、それぞれ週に2時間ずつ授業が行われている。大学で提供されている8レベルの日本語コースの中の5レベルであり、一つ前の4のレベルで『みんなの日本語 初級』の50課までの内容が終了している。このコースと一つ上の6レベルを履修後、卒業していく学生も多いため、これらのコースの全体目標として「自立した日本語学習者になること」が掲げられている。履修者数は、コロナ収束直後留学に行く者が増えたため一時的に減少したこともあったが、例年70から80名ほどであり、本アクション・リサーチを行った2024年度は76名であった。

2.1 課題をめぐる授業デザイン

「Writing」モジュールで掲げられている到達目標の一つに「やや複雑な内容について説明する文章が書けるようになる」があり、これに関連して、手順や方法を説明する文章の練習を授業で行った後で、以下の課題を宿題として出している。

表 1 「説明文課題」

『(大学食堂の名前)の利用方法』

(大学名)に留学している日本人留学生のために、大学内のいろいろな施設やサービスの利用方法をまとめた小冊子を日本語で作ることになりました。あなたは(建物の名前)にある「『(大学食堂の名前)』の利用方法」について紹介するページの担当になりました。この食堂を全く利用したことがない、日本から来た留学生が一人で利用できるように、そして、できるだけ満足できるように、分かりやすく親切に利用方法を文章で紹介してください。「食堂に入ってから出るまで」具体的にどうしたらいいかについての説明を含めて 600 字以上 700 字以内にまとめてください。

大学内にある大きな学生食堂の中の一つの利用方法を日本から来た留学生にとってわかりやすいように指定の字数で説明するという課題である。この施設の利用方法は学習者自身が基本的によく知っていて馴染んでいるものであるが、ローカル・ルールともいえるべき明文化されていない内容も多いため、何も知らずにこの施設を利用しようとすると、かなり困惑することが多いと考えられる。

この作文のためには、設定されている読者(日本から来た留学生)の立場になり、指定の字数に収まるように、書く内容を吟味・取捨選択し、目的に合うように工夫する必要が求められる。また、この学生食堂は数多くの料理や食品を提供しているため、買う食品や料理によって受け取り方法が異なるなど、利用方法がかなり複雑であることから、到達目標の「やや複雑な内容」に合致した複雑さレベルの内容を説明する文章が求められる。

提出後には「ピア・レビュー」をする時間があり、五人ほどのグループでお互いの作文を読み合い、今回の課題での「いい文章」のポイントについてディスカッションし、学んだことを書き残す活動がある。この内容は教師によってまとめられ、授業で共有される。さらに学習者は教師から自分の作文について個別のフィードバックも受け取る。

また、学期末には closed-book の形でテストがあり、学習者には「学期中に学んだ広範囲に及ぶ内容から出題される」と伝えられており、記述問題についてはこのトピックそのままではないものの、手順や方法を説明する文章が課されている。

2.2 今年度の変更点

上記のような流れで、「やや複雑な内容について説明する文章が書けるようになる」という到達目標の一つを達成する授業デザインになっているが、今年度(2024年9月開始)の授業においては以下の二点の変更を行った。

2.2.1 変更点① 課題を行う際の注意点

課題を行う際の注意点として、従来から以下の説明をしている。

表 2 従来からの「課題を行う際の注意点」

- ・自分で内容を考え、600字~700字になるように編集すること。
- ・日本語についても自分で調べて書くこと。
- ・他の人に書いてもらってはいけない。

-
- ・剽窃 (plagiarism) 厳禁。
-

今年度は表 2 の内容に、以下の注意を付け加えた。

表 3 今年度追加の注意点「アプリや AI などの使用について」

-
- ・アプリや AI などの使用について
「自分の日本語能力を向上させる」使い方をしましょう。
 - ・内容や構成については、アプリや AI に頼らず、自分で考えてください。
自分がよく知らない難しい文型／文法を使って書く必要はありません。
基本的に自分が使える文型／文法を使って書きましょう。
アプリや AI の使い方は様々です。
例：作成中、分からない語彙を調べたり、文型や文法について確認したりする。
書き終わった後、さらにアプリや AI などを使って、確認・修正する。 など
アプリや AI を使用した後は、必ず確認し、そこから「学習」してください。
-

AI や AI が組み込まれた様々なツールがこれほどまでに進化・普及している現状を鑑み、これらの使用をあらかじめ考慮に入れた上で、「自分の日本語能力を向上させる」使い方を働きかける内容を追加した。

2.2.2 変更点② 「学習ノート」の提出

「自分の日本語能力を向上させる」AI ツールの使い方を促す一つの方法として、今年度初めて説明文課題とともに以下の「学習ノート」を提出させることにした。

表 4 今年度追加の提出物「学習ノート」

-
- 説明文課題を完成させる過程で、新しく学んだ語彙や文型、文法事項などについて、メモを残してください。
- ・「箇条書き」でいい
 - ・A4 サイズの紙に 1~2 ページぐらいにまとめること
-

あくまで説明文課題がメインの提出物であるため、「学習ノート」についてはレポートといった正式な形ではなく、簡単なメモ形式で提出させることにした。

3. 結果

このように、課題文作成において、学習者の AI ツールの使用を想定し、「自分の日本語能力を向上させる」使い方を働きかけたのであるが、筆者はこの授業を長年行ってきている中で、今回初めて学習者に対して課題作成での AI の使用をはっきりと打ち出したため、提出される作文に明らかな特徴的变化が出てくるのか非常に注目していた。特に AI が生成する文章の特徴としてよく指摘されている内容や表現の均質化が顕著に表れ、最悪、提出後に予定していた、学習者がお互いの提出作文から学び合うピア・レビューが立ち行かなくなるほど似たり寄ったりの作文ばかりが提出されないか危惧していた。

しかしながら、精緻な検証ではないものの、内容や表現が均質化されたという傾向は見られず、例年通り多様な作文が提出されており、ピア・レビューでもお互いの作文から学び合うことができていた。

また、今回初めて提出させた「学習ノート」であるが、学習者全員が課題とともに遅れることなく提出していた。記述の量や内容には違いが見られたが、新しく学んだ語彙の記述を中心とするものが多かった。

4. 今後の展望と課題

今回、学習者が実際にどのように AI ツールを使用していたのかについては調査をしていないためわからないが、学習者の AI 使用に対するビリーフ、AI ツールに関する知識・習熟レベルなども影響していることが考えられる。今後は、質問紙調査やインタビュー調査などによって、これらについて明らかにすることも考えている。

筆者は授業のデザインとして、「授業での練習」→「課題作成」→「ピア・レビュー」→「教師からのフィードバック」→「期末テスト」といった一連のリンクした流れの中で課題を位置づけているが、この中で AI ツールというものを1回きりの課題を切り抜けるための便利な道具としてではなく、自らの能力を継続的に向上させていくことをサポートする道具として学習者に体験してもらい、今後もその使用方法が習慣化されれば、AI ツールは学習者にとって自らのプロフィシエンシー向上のための強力なツールになりうるだろうと考えている。今回の「学習ノート」の提出がこういった学習体験の契機となり、今後も AI ツールから有意義に学んでいくことができれば、当該コースの全体目標として掲げられている「自立した日本語学習者になること」への大きな助けになると考えている。

とはいえ、AI の進化は日進月歩であり、今後の進化の度合いが未知な部分もあるものの、今回学習者の提出した「説明文課題」「学習ノート」を見た限りでは、時折、コンテキストに合わない誤訳のような日本語も見受けられており、教師からの最終的なフィードバックがやはり重要な意味を持っているとも感じられた。

今回「学習ノート」は簡易なメモ形式で提出させたのであるが、学習者の学びやその内面化を促すためにはどのような形式がいいのかについて検討していく必要も感じている。今回提出された「学習ノート」を細かく見て改善やさらなる発展を考えたい。

さらに、従来から行っている「ピア・レビュー」は、学習者がお互いの作文から学び合う場であるが、今後、その際に「AI ツールの使用」についてもトピックに挙げ、お互いの活用法や気づいた点について共有する機会にすることも現在検討している。

参考文献

小澤真 (2024) 「生成 AI・翻訳 AI 等ツールの使用を許容したフランス語作文の授業について」 『言語と文化』 23, 49-56

- 大工原勇人 (2024) 「「クラスメート」は生成 AI—IX (超上級) レベル日本語文章表現クラスの実践報告—」『同志社大学 日本語・日本文化研究』21, 39-55
- 水田佳歩 (2025) 「思考力重視の作文指導に生成 AI を取り入れる可能性について」『青山スタンダード論集』20, 79-89
- 吉田信介 (2025) 「生成 AI 活用による「気づき」を重視したライティング指導」『関西大学高等教育研究』16, 81-84
- 吉村由紀 (2023) 「ChatGPT の日本語教育における活用可能性と懸念：生成文章の類似点・相違点の分析より」『2023 CAJLE Annual Conference Proceedings』196-205